

# 日本列島古代の城郭と都市

Castles and Cities of the Japanese Archipelago in Ancient Times

阿部義平

- ① 古代城柵研究への視点
- ② 城柵施設研究の展望
- ③ 西日本山城と郭の研究の展開
- ④ 都市と城郭
- ⑤ 歴博と城郭研究

## [論文要旨]

日本列島に展開した各時代史において、村落や都市などを守る拠点、あるいは全体を囲む防備施設が存在した。弥生時代の環濠集落を嚆矢として、各時代に各々特色ある防禦施設あるいは軍事施設の様相が展開したことが知られてきた。中世や近世の城郭がその代表例であるが、各時代を通じた施設の実態や変遷、多様性などはまだ十分に把握されておらず、解明を要する。

西暦7～9世紀頃の古代国家の時代には、西日本に山城、列島中央部に都城や関、東日本に城柵の造営があり、それらと関わる歴史の展開が知られている。文献で知られている遺跡の大半は考古学的調査が及んで居り、文献にみえない遺跡まで知られるに至った。多大な労力と費用をかけて維持された古代の大規模なこれらの施設の歴史は、対外交流を本格化したこの時代の特質と深く関わっている。これまでの定説的理解では、文献史料の限界や考古学的蓄積の不足もあって、その実態が知られないままに、極めて過少に評価されてきた面がある。小論では、日本列島の古代において、必要に応じた十分な施設が、国家統合や防衛、都市や村落の防備において、日本列島各地に展開した事例を指摘することができる。その代表例として、大宰府や平城京、東国の城柵の一例をとりあげてみた。しかし防備施設の普遍的存在や時期的展開には、まだ十分に明らかになっていない点も多い。村落でも、7～8世紀、10～11世紀などに、一定の地域で必要に応じた防備された村落が展開したことも判明してきている。小論は、古代における防備施設自体の実態、及び城郭と都市との関係について見直し、新しい見解を提案するものである。

## ①……………古代城郭研究への視点

日本列島において、律令時代を中心に、大規模な山城、都市城郭、関、城柵などが当時の国域の中心や国の両端部まで数多く造営されて、おおきな役割を果たしたのであるが、そのことはようやく近年になって全国的な分布や歴史上の見通しが可能になった事柄であり、今後も研究を深化させていく過程にある。古代城郭の実態研究は、列島の歴史上の防備施設の一部として評価されるべきものであるが、全体像も古代での評価も、まだ十分に定まっていないと考える。これまで、文献に残された城郭の存在から、西日本中心の山城は、大陸の唐や半島との交流が高まった時期に、大宰府周辺や対外交通上の要所にいとなまれていたものの、奈良時代には既に廃城になったものが多いとしてきた。また都城という呼び方が通用される京でも、畿内中心の変転がこの時期に認められるものの、そこには都市城郭は通じて見うけられず、平城京・平安京でのわずかに正面に設けられた形式的施設として存在したにすぎないとしてきた。これらのことから、都市史の上でも、日本列島という島国では古代以来、都市の外形や防備面も不明瞭な経過をたどったとさえ評価されることが多かった。都城も、中国などの整った制度を模倣したあり方、そしてその不充分さ、都市実態の未熟さが指摘され、それがその後も分析の視点として後代まで適用されてきたことが見てとれる。

東日本中心の城柵（実際は南九州にも存在）も、文献に登場する施設中心に研究が進められてきたものの、日本列島内での北方住民に対処する施設であったとしても、実態は矮小なものであったとする視点が色濃く研究史に反映している。その具体的表れは、実際に発掘調査に担さわる考古学の担当者から提起された城柵官衙説（城柵の実態は地方官衙であるとする主張）に表れている。西日本の山城の研究も、東日本の城柵研究も、文献に残された施設研究をようやく越えて、本来のあり方の全貌が伺いうるに至ってきており、それによれば山城の展開史も、都城の展開史の内の特に防備施設面の展開も、東日本の城柵の展開も、これまでの評価、あるいは研究方向を点検し再検討すべき時に至っている。当然なことながら、防備施設のあり方は、各時代ごとの歴史的課題に対応して変転を重ねたものであり、各時代に特有の豊富な歴史的遺跡を残している。古代のあり方は、対外的交流が織りこまれた時代として、固有の状況も認められる所である。古代の都市の発達という事象と防備施設の発達との関わりも、必要な条件の生じた所には明瞭に認められるのではないかと予想される。地方官衙ですら、必要な条件下ではそれなりの防備施設が認められるのが実態なのではないか。

筆者はこれまでも日本における都城・山城・城郭、城柵など発掘調査の本格的展開、あるいはその保存対策の展開に立ち合う機会を得た世代の一人として、発掘成果の積み重ね等の経過を注目してきた。多大な近年の成果がいかに歴史研究を修正していくかに目を見張るとともに、今後も成果が期待できると考えるのであるが、同時に各々の地域の研究にいくつかの研究視点を加える必要を痛感している。歴博もまた展示や共同研究において、各時代の人々の労力が集中したこの種の施設をとりあげてきており、全体的に研究成果を検証し、評価していくことが可能で、歴博が荷うべき課題の一つとなっていると考えられる。

## ②……………城郭施設研究の展望

1982年に「古代の城柵跡について」の小論をまとめた時、施設の造営技法やその変遷、古代城柵の歴史的な流れと制度、現状の研究の焦点について検討した。そこで西日本では神籠石式山城の解明と朝鮮式山城との関係の把握、東日本では城柵各自の解明とともに、研究の方向付けとして、城柵が役所の一種で軍事性を認めがたいと主張する現場見解にも問題がある事や、古代都市の羅城も早期に形式化したとされる事が、日本で都市城壁が発達しない原点とされるが、古代都市の防備施設の有無もまだそれ自体まだ問題であることにふれた。<sup>(1)</sup>西日本の山城も、養老3年(719)に軍団等を減定するとともに、常城と茨城の二城を廃した記事に代表されるように、山城は全体的に活用されなくなったものとされていた。以下でその後の各方面での防備された施設(第1表)の研究の経過を見ていきたい。

1994年に佐藤宗淳氏を編者として「日本の古代国家と城」が出版された。<sup>(2)</sup>弥生時代の環濠集落や高地性集落、古墳時代の居館、朝鮮式山城、古代都市、新城「大宰府」の成立、古代国家と東北の城柵、鈴鹿関と不破関、国衙と郡家の各事項がとりあげられている。編者が述べているように、古代の城の実態・機能が果たして軍事・戦闘的施設であったかという近年の論点がベースにあり、「城柵官衙」説を点検して古代国家の軍事施設の特質に迫ろうとするものであった。1995年の放送大学の教材の白石太郎編「歴史考古学」<sup>(3)</sup>では、飛鳥・奈良・平安時代の考古学的成果をとりまとめている。その内で飛鳥の諸宮から長岡京・平安京までの実像、大宰府と鴻臚館、多賀城と古代の東北などの成果がまとめて紹介されている。岡田茂弘氏の「多賀城と古代の東北」の論考の内では、「古代の陸奥・出羽二国に設置された城柵は・・・蝦夷の攻撃に対する防禦の砦的な施設と理解されてきた。・・・いずれも中央に政庁を置き、周囲を築地あるいは材木列等の代替施設で囲繞したものであった。・・・城柵の政庁と国府の政庁とはほとんど違いはない。政庁をはじめとする諸官衙施設を、要所に櫓を配置し四方に門を開いた築地等の外部施設で囲いこむことが城柵の実像である」と結論している。従来からの論を代表したまとめではあるが、ここには大きな問題がある。進藤秋輝氏も1997年に「多賀城と遠朝廷」の考察<sup>(4)</sup>で、故伊東信雄博士を中心に1961年から65年まで行われた調査では、多賀城は蝦夷に対する軍事的砦であり、したがって内城の区画施設も土塁という想定で調査がすすめられたという。その後の「城柵官衙」説が秀れた発掘成果であるとするのだが、伊東信雄氏は1966年に発掘のまとめとして、「多賀城は人も知るように律令政府の東北経営の基地として、奈良時代に鎮守府および陸奥国府の置かれた所で、九州における大宰府と並び称せられる古代史上の重要遺跡」と位置付け、「政庁跡」として中心部を調査し、「築地土塀」で取り囲むことを確認したと明言している。<sup>(5)</sup>このような研究史だけでなく、発掘の上でも遺跡の把握力や事実認識の上でもボタンの掛け違いが直されずに城の評価、政庁の配置変遷、大宰府などとの対比評価などで偏った自己成果の宣伝などの問題点がそのままにされてきたのである。<sup>(6)</sup>また最近、城の外側に都市的郭の防備施設があることが、宮城県東山遺跡の外縁で報せられた。これまでも複郭構造をもつ城柵が複数存在することが知られていたものを、都市城郭の視点から評価を見直す重要な観点を提供している。更に多賀城の本体が奈良時代には城としての外圍施設が丘陵部の一部だけ作られただけで、

第1表 古代日本の既知防備施設一覽 (阿部1982を補正)

名称	所在比定地	参考事項 (初出年)	名称	所在比定地	参考事項 (初出年)		
朝鮮式山城	金田城	長崎県美津島町	石築城, 内郭土築塙, 複郭?, 667年	関	不破関	岐阜県関ヶ原町	塙式 (709年?)
	大野城	福岡県大野城市他	倉庫群, 複郭, 665年		鈴鹿関	三重県関町	672年
	基肄城	佐賀県基山町他	倉庫群, 複郭, 665年		愛発関	福井県敦賀市	
	鞠智城	熊本県菊鹿町	倉庫群, 複郭, 698年修	参考遺跡	両槻宮		656年
	稻積城		九州北部説・南部説 698年修		岡本宮東山	奈良県明日香村	656年
	三野城		九州北部説・南部説 698年修		蘇我氏宅		谷宮門, 上宮門 644年
	長門城	山口県下関市?	665年		畝備山東家		644年
	屋嶋城	香川県高松市	複郭部 667年		法興寺	奈良県明日香村	645年
	常城	備後国	719年廃		城牟礼山	播磨国	播磨国風土記
	茨城	備後国	719年廃		湊足柵	新潟県	647年
	高安城	奈良県三郷町, 他	倉庫群 667年		磐舟柵	新潟県	648年
	三尾城	滋賀県	672年		都岐沙羅柵	山形県	658年
	神籠石式山城	御所ヶ谷	福岡県行橋市		複郭, 石城部, 倉, 京都市関連?	出羽柵	山形県
鬼ノ城		岡山県総社市	石築部, 城と郭 倉庫群	出村柵・秋田城	秋田県秋田市	733年・複郭, 塙柵式	
城山城		香川県坂出市	複郭, 礎石, 石築部	多賀柵・多賀城	宮城県多賀城市	城下都市・塙柵式737年	
おつぼ山		佐賀県武雄市	列石一部欠	牡鹿柵	宮城県	737年	
帯隈山		佐賀県佐賀市		新田柵	宮城県田尻町	複郭, 塙式 737年	
高良山		福岡県久留米市	列石欠部	色麻柵	宮城県中新田町	城生柵跡, 塙式 737年	
女山		福岡県瀬高町	列石欠部	玉造柵・玉造城・玉作塞	宮城県	(移転?) 737年以降	
把木		福岡県把木町		宮沢遺跡	宮城県古川市	複郭・塙式・平安時代玉造柵?	
雷山		福岡県前原町		小寺遺跡	宮城県古川市	複郭・塙式・奈良時代玉造柵?	
鹿毛馬		福岡県頼田町	列石欠部	桃生城	宮城県河北町	複郭 (西部)・塙柵式 758年	
宮地岳		福岡県筑紫野市	列石欠部	雄勝城	秋田県	758年	
唐原		福岡県大平村	列石欠部, 登美鎮関連?	弘田柵跡	秋田県仙北町 他	第二次 (平安期) 雄勝城, 二重郭, 柵式	
石城山		山口県大和町		伊治城	宮城県築館町	塙式 767年	
永納山		愛媛県東予市		覚鯨城	宮城県	780年	
大廻小廻山		岡山県岡山市		由利柵	秋田県	780年	
城山城		兵庫県新宮町	門礎確認	胆沢城	岩手県水沢市	塙式 802年	
怡土城		福岡県前原町	望楼群 756~768年	志波城	岩手県盛岡市	塙式 803年	
大津城		福岡県	772年	中山柵	宮城県	804年	
水城		福岡県太宰府市他	664年	徳丹城	岩手県矢幅町	塙柵式 814年	
大宰府羅城		福岡県 佐賀県	小水城, 関屋, とうれぎ土塁	河辺府	山形県?秋田県?	804年	
上津土塁		福岡県久留米市		城輪柵跡	山形県酒田市	塙柵式 出羽国府	
堤土塁	佐賀県上峰村		八森遺跡	山形県八幡町	柵式 出羽国府		
板柵鎮	北九州市	740年	大室塞	山形県	780年		
(某鎮)	島根県	山陰道節度使鎮所・他6要所 (732~734)	能代営	秋田県	878年		
平沙戊	出雲国	出雲国風土記	郡山遺跡	宮城県仙台市	柵式 (二期), 郭下 (柵式?)		
瀬崎戊	出雲国	出雲国風土記	赤井遺跡	宮城県矢本町	柵式期, 後に牡鹿郡		
城山 遺跡	鹿児島県国分市	大隅国府近傍	東山遺跡・壇の越遺跡	宮城県宮崎町	城と郭, 塙式, 塙柵式 五柵の某柵・賀美郡? 737年		
(某柵)	九州南部	(複数?) 702年	名生館遺跡	宮城県古川市	柵式期 柵 丹取郡・玉造郡 軍団		
難波京	大阪府大阪市	羅城 (679年)	三輪田遺跡	宮城県古川市	「大住団」木簡		
藤原宮	奈良県橿原市	宮大垣 (塙式) 694年	衣川営	岩手県	789年		
平城京	奈良県奈良市他	宮城垣, 羅城垣 710年	白河関	福島県白河市	835年		
恭仁宮	京都府加茂町	宮大垣 (塙式) 740年	菊多関	福島県いわき市	835年		
平安京	京都府京都市	宮城垣: 羅城垣 794年					

- 宮都, 関割は代表例のみ示す
- 官衙, 烽候, 村落, 宅家, 屋敷等, 北部日本, 南島等の在地事例は除外
- 7~9世紀を中心とする事例を集成

低地は全く閉鎖されていないという見解が公表されているが、<sup>(8)</sup> 調査地点や施設の撤去や移動や削平などの残存条件の認識などの点で疑問がある。多賀城の東北隅では時期を違えた外圍施設が二重あり、新しい施設の一部は古い施設の線上に造られながら、古い施設の存在を掘り出すことが出来なかった前歴もあるので、更に実証と総合的な再検討が必要である。

次に1996年に石井進氏らが編集した「城の語る日本史」で、倭国乱から近世城下町に至る日本列島の各時代の城が示す歴史が語られている。<sup>(9)</sup> 筆者も「古代の都城と山城」において、西や東の山城や城柵の調査成果の紹介の他に都城や大宰府の羅城などもとりあげた。古代都市を囲む城壁の問題は、都市史上でも大きな問題となるが、論点はまだ少なかったのである。

続いて、東国への入り口付近に設けられた関の問題がある。1994年に柴田博子氏は「鈴鹿関と不破関一壬申の乱とのかかわりをめぐって」の論考で、<sup>(10)</sup> 関割についてまとめた。愛発・不破・鈴鹿の三関を代表例とする関のように常に守備される例や、出雲国風土記にみえる例など、必要に応じて守備される例を含めて、全国にこの種の施設は多数置かれたと考えられるが、三関は法律上も「城」として扱われ、城門があり、城主として国司達が守備に当たったという。実際の遺構が不破関で調査され、また鈴鹿関でも熱心に追求が続けられている。不破関は、築垣による不整形の外郭をもち、その東北隅近くで和銅銭をいれた土師器甕の鎮壇具や櫓状の施設も検出された。<sup>(11)</sup> 全国的には関は789年に停廃されたが、その後も必要に応じて関閘使などが遣されていた。東北辺の城柵と比較できる規模の関が東国の入り口の三国に置かれたとみられることや、諸国にも各レベルの関割が置かれたことは明らかで、その遺跡の実態は今後の調査が期待されている。

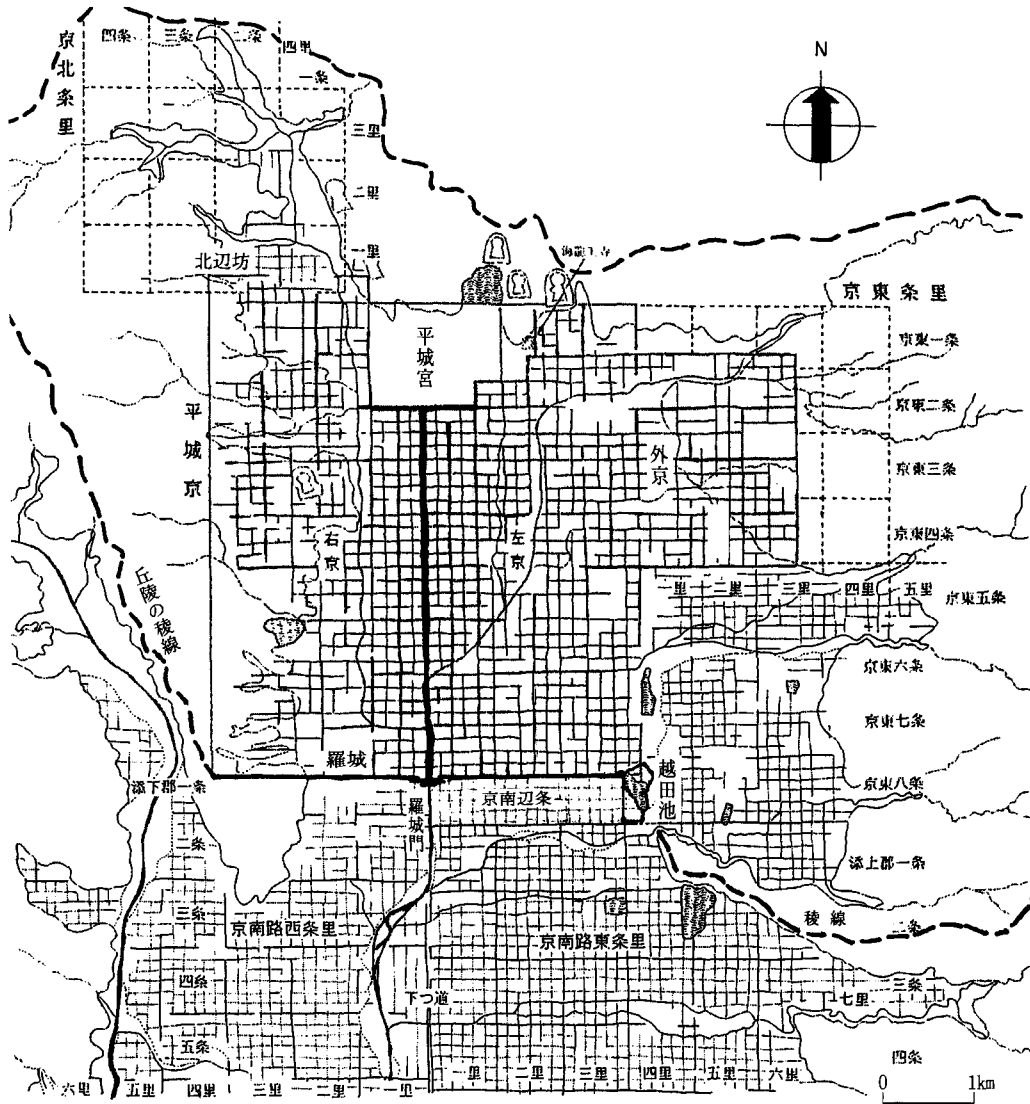
畿内の都城も十を越す数をかぞえ、変遷研究が重ねられている。条坊方式などの都市設計や大小の住宅区内の生活、寺や市などが解明されてきているが、<sup>(12)</sup> 防備施設については成果は多くない。天武朝にみえる難波京の羅城について、木原克司氏は「難波京一瀬戸内と京のはじまり」の内、大宰府の水城と同じように西側の海からの攻撃に対する土塁状の施設が、上町丘陵西側の難波砂堆上に南北に連なっていたと推定し、四天王寺近くの上町台地の茶白山の高まりは時代的にも該当しないという。この羅城については全く課題のまま残っていることになる。いわゆる藤原京は、10里四方説が提示されて有力視されてきているが、外周の防備施設は指摘されていない。倭京内では後飛鳥岡本宮の東方に当たるとみられる丘陵付近に酒舟石遺跡があり、丘陵を巨石や切石積の列と版築で加工した施設が判明してきており、頂部に酒舟石、北側の谷状の低地にも亀形の石造物などからなる祭祀施設が展開することが知られてきた。<sup>(13)</sup> 版築や切石積や巨石例などは西国の山城と通じる所もあり、注目される。今のところ城郭施設とは言いがたく、斉明朝に「岡本宮の東の山に石を重ねて垣とした」という施設に当たる可能性が高い。他に東方山上の田身嶺上に周垣をめぐらせた両槻宮とよぶ防備された施設がまだ眠っていると考えられる。酒舟石遺跡については後にまたとりあげたい。

都城の中で注目したいのは、平城京での研究成果である。平城京では宮は宮城垣とも大垣とも呼ばれる大規模な土築の牆構造に囲まれている。藤原京では宮は掘立柱の柱の間を厚い土壁でふさぐ構造の大垣なので、両宮の間で外圍施設が変更になり、新しい施設が導入されたことがわかる。藤原京の外側を囲む防備施設はいままでの所、存在しないと考えられているが、平城京においては、条坊京の南辺中央部で羅城門跡が調査され、門の左右に1町分程だけ羅城の築垣がのびて南への突出部が造成され、南辺とこの突出部をとり囲む幅広い濠が京の両端まで東西にのびるだけの南限施

設とされてきた。<sup>(15)</sup>1998年に井上和人氏は「平城京羅城門再考」で平城京の南辺部について再検討を加えた。<sup>(16)</sup>その結果、羅城門はこれまでの復元より大きい7×2間の門となり、羅城は九条大路の南に沿って東西4キロをこす南辺全体に築かれていたものと復元されるに至った。発掘が及んだ羅城の東方部分では、左京内の坊間路の南に当る付近で羅城を開いて設けられた外門跡も認められたのである。また羅城門から、左京の東端に至る京の南辺の外側には、これまで京南辺条里と呼ぶ特殊条里部分が付くとされてきたが、ここを京南辺に付設された築地などで囲む施設であるとみている。その東辺には越田池（現在の五徳池）が設けられ、その西のあたりを中道<sup>(17)</sup>の延長の大路が南北に通って京に至っている。平城京の南辺を図上でみると、南辺全体に羅城がのびることにより、大和平野の北端部に京を取りこんで、その南辺の西は、後に大和郡山城の築かれる丘陵付近から、東は奈良市帯解付近まで東方から伸びてくる低丘陵までの間をふさぐ形をとり、その東端での丘陵との間の空間を南北につなぐ形で越田池と京南辺の付設地の囲いがある。即ち三方を山と丘陵の稜線で囲まれた京の南辺は、せばまった丘陵間の平地を閉ざす形で、羅城とその付設施設を設けている。京の東辺には東方からの河川を集めて南に流しており、これらにより平野が遮断されていたことがみとれるであろう。（第1図）丘陵と羅城施設に囲まれた内側には、東方に外京をひろげた京と京東条里区、北に京北条里が囲いこまれている。これらは下道などの主要交通路からのアプローチ、あるいは平野の景観として、平地の京が山丘と城壁とで囲いこまれていることとなり、大宰府におけるアプローチの正面となる西北方の水城や山城やそれに続く羅城線に当る丘陵のあり方（第2図）と基本的に一致する。井上氏は大宰府との関連性にまで言及はしていないが、平城京の外京や北辺坊などを含めた京の広がり、朱雀大路と宮の設定、南辺のあり方などは、藤原京で復元されるまさに10里四方の京を、平野北端の平城京地区に移す時の設計上での様々なつながりと工夫を示すとともに、京が少なくとも平野部の羅城と丘陵で囲割されている状況を作り出したと考えられる。藤原京からの移転事情については別稿で考えたいが、奈良時代の都城は、かかる京の構えがとられていたことになる。

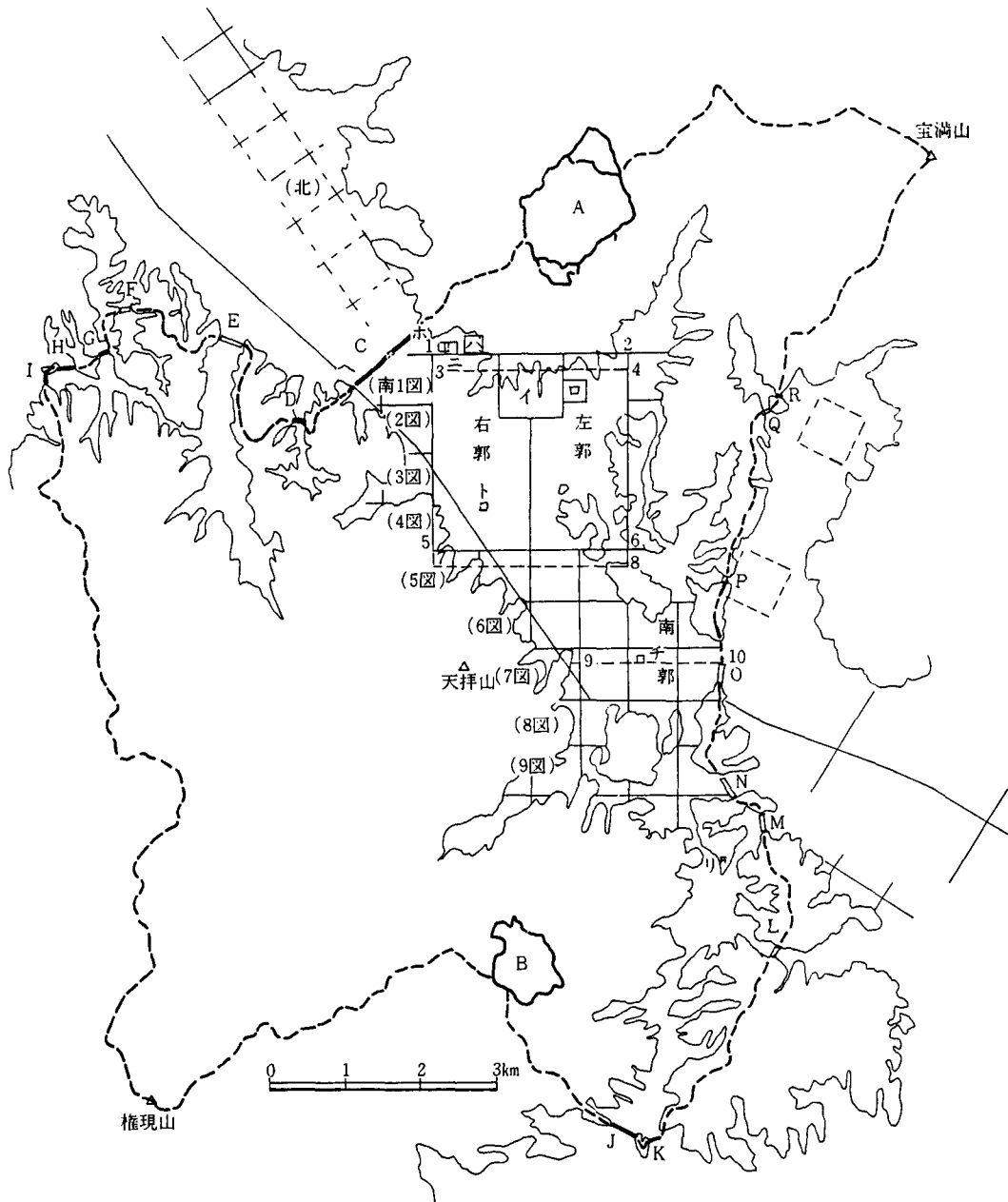
なお平城京から短期間遷都した恭仁京や紫香楽京についても、宮の中心的部分や規模などが判明しつつあり、条坊式の都市計画を施行していない京のあり方がみえてきている。<sup>(17)</sup>難波京の都市的な広がりについても、1997年に積山洋氏が方格地割などの検討を行い、そこに南北軸の法格地割もしくは溝が断片的に認められること、それが朱雀大路付近だけでない広がりをもち、年代的に飛鳥時代に遡るものがあって、方900尺割の他に方600尺割とみられる二者の事例が認められるが、その前後関係や全体的な復元等は<sup>(18)</sup>まだ困難であることを検証した。7世紀の近江京や難波京に、600尺割の都市地割が先行してあったことを<sup>(19)</sup>筆者は予想した事があるが、その点はまだ問題として残っていることとなる。

西日本の山城等の調査は、知られている山城等のほとんどに調査が及び、研究が進展している。その成果は最近では1997年と2000年に小田富士雄氏によりまとめられている。<sup>(20)</sup>氏の「西日本古代山城に関する最近の調査成果—特に朝鮮式山城について」の論考では、朝鮮式山城の所在や文献についてのまとめの上で、大野城、水城、基肆城、大宰府羅城説の検討、鞠智城、金田城、屋嶋城の成果と問題点が詳述されている。また神籠石系山城の調査成果も紹介され、1999年の2ヶ所の新しい神籠石系山城の発見事例を追加している。御所ヶ谷神籠石、鹿毛鳥神籠石、鬼ノ城山城の成果を示



第1図 平城京と羅城 (井上 註(16)の図に加筆作成)

して、神籠石系山城と朝鮮式山城の関係について論説し、西日本山城の重要な問題点が浮き彫りにされている。朝鮮半島山城との関係もとりあげ、占地や技法をみた上で系譜関係についても言及した。このように西日本の山城の調査は急進展しており、古代山城研究会などの活躍も目ざましいものがある。所在が南九州説と北九州説に分れ、いずれも地点不明の三野城と稲積城も含めた山城分布についての一案が、1994年に磯村幸男氏の「北部九州の古代防衛施設」に示されており、所在不明の城があることは、南九州の柵の実態とともに課題として残っている。西日本古代山城等の問題は、神籠石式山城の内容が判明してきたことにより、大分しぼられてきている。朝鮮式山城と無関係でない事例もある反面、城の様式の違いも再認識されてきた所である。向井一雄氏は1999年に「石製唐居敷の集成と研究」で両様式の山城にまたがってみられる門礎の研究をとりまとめた。<sup>(22)</sup>



第2図 大宰府の羅城・山城と郭地 (阿部 註(33)の付図による)

A 大野城	G 大土居
B 基肄城	H 天神山土塁
C 水城	I 天神山土塁
D 上大利土塁	J とうれぎ土塁
E 春日土塁(堆)	K 関屋土塁
F 小倉土塁(堆)	L~R 土塁想定地



古代を前後する時期の防備された施設についても、歴史的な評価がまとめられるに至っており、1998年に「古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題」が東日本埋蔵文化財研究所群馬県実行委員会等により公刊されている<sup>(23)</sup>。また古代から中世にかけての城と館の問題について1994年に「城と館を掘る・読む」がまとめられ、<sup>(24)</sup> 庁と館、掘、平安時代の国と館、北部九州の古代防衛施設、鎮西における居館の出現と展開、空間としての「城郭」とその展開、館の社会とその変遷の問題がとりあげられた。古代山城等<sup>(25)</sup>に続く時代に焦点があてられたものである。栃木県宇都宮市の史跡飛山城跡での古代の墨書土器「烽家」の発見を契機に、軍事とも関わる情報伝達手段である烽について、1997年に「烽の道」がまとめられた<sup>(26)</sup>。烽火の制度は799年に大宰府管内を除いて全国的に廃止されたものの、東国ではその後も存在したことなどをとりまとめている。律令制下では兵部省の下に組織され、出雲国を含む各国に置かれたものである。また駅制も兵部省の兵馬司下に組織された通信伝達網であるが、これについても近年の成果が大きく報ぜられている<sup>(26)</sup>。

文献史の成果を含む総合的な成果として、1999年「人類にとって戦いとは②戦いのシステムと対外戦略」が国立歴史民俗博物館から公刊された<sup>(27)</sup>。そこで下向井龍彦氏は「律令軍制と国衙体制」について論じている<sup>(28)</sup>。日本という律令国家の軍制は総兵力が20万とも推計される巨大軍隊であり、これが701年から792年までのほぼ一世紀近く維持されたのである。その負担は個人にとっても国家財政にとっても重かった。兵士の制度は、全国に置かれた軍団として具体化し、戸籍の一戸に一人の兵士を出すような一種の皆兵制がしかれたわけである。それは弥生時代以来の農業共同体軍の伝統が国家により体制化して編成され、極限まで発達した姿だという。本来は大化前代の国造軍が大化後に評造軍に編成され、百済救済の戦争に動員されて大敗し、統一国家の軍隊に両編成されて軍団制に到達したものであるが、奈良時代の内でも軍拡と軍縮をくりかえした。この軍事的な体制は奈良時代末まで基本的に維持されて、対新羅外交における軍事力による威嚇に用いられ、何度か実践的な体制準備や施設整備も行われている。天平年間初めの節度使、怡土城の造営などもその表れである。その軍隊も、780年に大幅に軍縮で減らされ、対新羅外交も実質的に解消に至った。軍団兵士はついに東と西の辺要国を除いて792年に廃止され、それ以降の実質的な兵制は、国衙軍制として進展するが、律令制に基づく軍団制による兵士の解体は、律令国家体制の変質と評価されるべきものと下向井氏は強調した。789年の関の廃止、799年の烽の停廃など、財政改革を伴った見直しが続き、律令国家は対外的な戦略を失った小さな政府になるという。一方、774年から東北辺では38年間の対蝦夷の大戦争時代が起こった。780年の大きな反乱では、多賀城を初め、それまで築かれてきた城柵網は全て水泡に帰したのである。こうして蝦夷との対決が桓武朝の課題となっていく一方で、内国の軍団制は廃止された。このように対新羅用の律令軍隊の廃止をみる説に対して、中尾浩康氏は「延暦十一年の軍制改革について」において<sup>(29)</sup>、軍団制から健児制への転換が、実質的な軍事力の確保という点で政策的に貫かれており、対蝦夷戦争でも、軍団兵の動員では大敗を重ねて対処できず、実質的な方策がとられたと解している。焼き払われた城柵網はやがて再編再建され、対蝦夷戦争は国策として続けられ、ようやく勝利を得るが、その段階までは城柵はかえって強化されている面もみられる。西日本の山城等でも、奈良時代に停廃例の記事はあるものの、實際上維持された山城の実例が判明してきており、律令軍制の実質と施設維持の点から律令国家の一面とその時期変遷をみることができそうである。

もう一つの奈良時代史の視点としては、軍拡がある一方で、軍縮もあって、文化政策やそこへの財政投入の時期として、一種の政策スイングの変遷としてみることに下向井氏は注目している。軍事的な施設の増設や削減は、その政策のハード面での表れとして、歴史的な評価ができる可能性があることになろう。軍団の基盤の上に衛士軍、防人軍、鎮兵軍が常備的兵力として、軍団兵士とともに施設の維持などにも当るわけで、この時代に次々に起こる軍事的な状況は大分明らかとなってきている。しかし、考古学的な発掘成果の総括として特に東北方の古代城柵は一般性を帯びた行政機関の容れ物で、軍事的に作られていなかったなどの評価が出され、また都城は名ばかりの飾りの羅城しか持って居らず、西国の山城なども早期に停廃されたという今日の見解は、まず実際の遺跡調査の検証から再出発すべき重要な課題である。東日本で発掘関係者が期待する砦的軍事施設とは、西日本の山城のような逃入用の防備施設だったのであろうか。古代の防備施設を造営し維持した人々や社会とその時代の歴史との関わりをもっと深く捉えなくてはならないだろう。山城・都城・城柵の研究から、新しい歴史を土中から掘り出し評価することがどこまでできているのであろうか。

### ③……………西日本山城と郭の研究の展開

西日本に展開した山城やそれと関連する郭とみられる施設、あるいは大宰府や国府などに関わる郭のあり方などの研究は、急速に成果をあげつつある。九州南部などにも古代山城が展開した可能性があり、まだ実態を現さない柵の展開も埋もれている。

西日本の古代山城の展開は、朝鮮式山城のほとんどが調査の対象となり、その実態が大分知られてきたことから研究が進展し、また謎の神籠石式山城の研究は、既知の山城の調査によりその謎が大幅に解明されつつあるといえるだけでなく、その存在が新たに知られるものがあり、まだ多数のこの種の山城が西日本各地の山丘に遺存していることが考えられるに至った。またこれら二種の山城がこれまで考えられていたよりも近接した時間の内に位置付けられ、築城技術としても関連して検討すべき面をもつこともしられるに至ったのである。また西日本山城の展開が、九州地方において大野城などで平安初期に至るまで文献上で認められることが、遺跡でもほぼ裏付けられ、九州以外の瀬戸内などに展開した山城でも神籠石式山城の一部を含めて、奈良時代後半まで維持されていたことが知られるようになってきた。これは文献史上での軍団の制度の存続などと密接に対応することでもある。西日本全体で、救百済の役以降に相接して、二種の山城が展開したことと、その間の主要で必要とされる山城が奈良時代に存続していたことを示すものである。あるいはそのような対外的な緊張と軍事的な体制の維持こそ、律令時代の特質を形成した重要な要因であったとさえ云える可能性が高い。律令時代は軍事体制の維持された時期、あるいはその体制が文化事業等にふりむけられることのできた時期と云えるかもしれないのである。この西日本の山城の研究については、「古代山城と対外関係」として2002年に阿部がとりまとめたので、事例及び論点の詳細についてはそれを参考とされたい。<sup>(30)</sup>

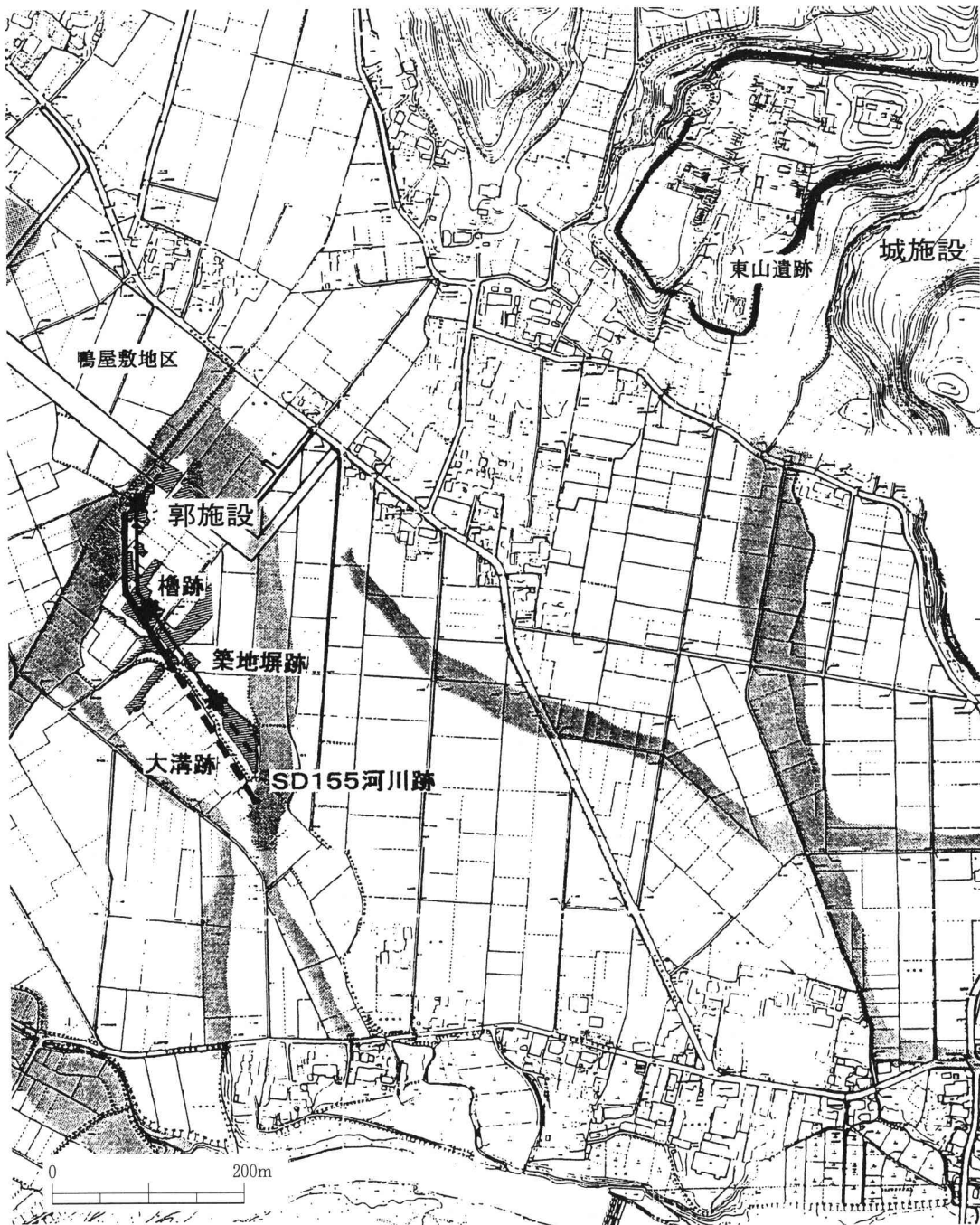
西日本では、地域防備的な配置の神籠石式山城の展開とそれが完成する前での造営の中断があり、その配置や造営様式の再点検に基づいて国家防備に集中した朝鮮式山城の造営が引き続いて行われ

た事例が復元される。山城は奈良時代初期に廃されたものもあったが、国府付近などの山城は、畿内に至るまでの連絡や防備上の拠点として奈良時代も維持されるものがあり、これは九州北部や瀬戸内海沿岸の要所というだけでなく、山陰や畿内を含めた西日本全体に通じた事象であったと考えられる。対新羅を中心とした対外関係の緊張を中心に、西日本の山城体制は維持され、新羅との関係が途絶した780年以降、軍事体制も施設も大宰府周辺を除いて役割を失ってしまったものとみられる。

山城だけでなく、山城の足下に郭を有したとみられる例、あるいは大規模な複郭式の山城をなす事例もみられ、国府などの政治拠点との関係が重視され、逃込用とみられる郭をもつなどの状況が一般的にあった可能性があるが、この点は大宰府近傍における大宰府郭やそれ以外の防備施設の存在、あるいは筑後国府における防備的な外周濠の存在などと合わせて今後のさらなる実態の解明や類例の増加の検討がなされるべきであろう。この点で山城を防備の核として都市城郭が広域に営まれたのが明瞭なのが大宰府の例であり、そこには郭地と呼ぶ都市予定部分だけでなく、条里地域すらも含めて囲いこまれていた。都市城壁と評価すべき点や朝鮮半島の諸国と通じる古代都城のあり方がみとめられる所である。筑後国府の例から考えると必要に応じて都市囲郭施設が少なくとも北部九州の各国にも認められる可能性が高く、また大隅国府と城山遺跡<sup>(31)</sup>のような逃込城的なあり方は更に一般的に西日本全体に存在した可能性が高い。東日本の城柵の事例からすれば、郡レベルの施設の防備、柵を中心とした外圍施設が存在した可能性も点検すべき事となろう。現在はまだ把握されていない要害地の施設の実態もこれから調査の網にかかって来るものと思われる。西日本の山城等の造営は、772年の監大津城司の廃止まで認められ、また大野城などは9世紀までその機能の維持がみられる。平安期にも対新羅での緊張時に旧山城地に四王寺が祭られるなどの事象が認められる。西日本山城体制は奈良時代末まで存続し、律令制度における国の共通した役割の一つとして、城柵や関と合わせて、城牧が項目にあがっているように、その維持は律令国家の重要な政策として規定され、国家政策が放棄されると軍事体制並びに軍事施設はリストラの対象となる。白村江の敗戦、藤原広嗣の乱などの事件、あるいは中央での軍事外交政策などがすぐ反映するものの、律令国家にとり重要な施設として維持され、当時の人々の汗で築かれた巨大施設、今となっては崩れ残った巨大遺跡が、古代日本の全域に展開していたとみられる。

#### ④……………都市と城郭

古代の都城は、都市住民や都市中核機能を集中させ、都市要件を備えたものとして、都市史の初めに置かれることが多かった。しかし弥生時代や古墳時代にもそれなりの都市の要件を備えた遺跡が発達する過程をみせることが知られてきた。古代の都城は、飛鳥における倭京の発達から平安京にまで及ぶが、防備施設の存在などはあまり明瞭ではないという。天武朝に難波に築かれた羅城はまだ見つかって居らず、平城京も平安京も、形ばかりの羅城と羅城門・坊城があるだけとされてきたのである。一方の大宰府<sup>(32)</sup>について、水城や門や小水城などで西方の平野部を遮断することが知られていた。これを大野城や基肄城を拠点に連なる山稜などと人工城壁を加えた広域の羅城の構成として、復元の提案したことがある。現地をよく知る小田富士雄氏から、構想はあったとしても施行<sup>(33)</sup>



第3図 埴の越遺跡の城と郭 (註(7)(36)から作図)

の証明はみられないとの批判を頂いているが、西方の小水城のあったはずの所で、その痕跡を失った所もあるので、稜線での加工の有無と合わせて、問題点として検討を続けたい。白村江の敗戦から四半世紀過ぎた持統朝の689年に新城が検査されており、この新城を長洋一氏の提案する都市大宰府の構想をさすものと解すれば、都市に当る郭内を包む羅城又はそれに相当する一定の施設が出来

ていたことが考えられるであろう。畿内においては天武朝にみえる新城は未完成と記されているが、平城京における城郭施設は宮城と羅城として成立していたとみられる点も考え合わせるべきでなかろうか。前章でみた平城京での羅城のあり方は、大宰府西面の距離にも倍する長さの平野の遮閉状況で、郭内に条里部分も含まれる点も同様である。北面の平城山は剝が置かれたりした要害地であった。その稜線内の面積は、平城京も大宰府も大体似た面積なのである。京での南辺羅城は、平安京では両側を区切る河川まで、形式化したとはいえ、南辺全体に当初構築されていて、平城京からの伝統の様式化がみられる。都城における防備施設は、山城を付設させることや、例えば紫香楽京のように、山河の自然を城壁にみたてる山水京や山城京といった防備の構えなども含めて今後も把握を進める必要があるが、平城京や大宰府といった構えが列島内で当時必要な要件とされた防備水準を達成していたものと評価しておきたい。

東北辺の城柵は、平安期に入って多賀城の城外に一種の方格地割による都市化が判明してきた他<sup>(35)</sup>は、都市やそれを囲む郭といった施設がとくに注目されることはなかった。しかし2000年度に調査された宮城県宮崎町の檀<sup>(36)</sup>の越遺跡では賀美郡衙跡に比定する説が強かった東山遺跡を北の高台において、平野部のほぼ1キロ四方以上に都市的な方格地割や道や宅地が広がり、奈良時代後葉に段丘差を利用して土築の築垣や柵木列やそれにのる櫓などによる防備施設を作って、外部の施設も収容したという城郭都市の状況が十世紀中頃まで存続したと考えられるに至った(第3図)。城の構成要素を備えていた東山遺跡は、径300×250メートルほどを囲い込んだもので、城柵施設としては小ぶりの方で、小規模な政庁や倉庫群などが設けられている。郭部分には東西道や南北道もみられ、ほぼ1町割の区画がなされていたことも推定されている。都市部には道路網や官衙や邸宅などが収容されている様子が伺われる。東山遺跡が城と郭の二重の構えを取った遺跡でありながら、賀美郡家に比定されるのは、天平九年に大野東人が秋田の出羽柵までの連絡路を開くという軍事行動を起こした記事に、賀美郡が路程を計る基点として出てくることによっていた。その記事では陸奥の多賀城の他の五柵等の存在が知られており、うち少なくとも一柵は名称は略されていた。この遠征全体の評価や道と官衙の関係、城柵と官衙の関係を含めて再検討が必要であり、施設状況から東山遺跡自体は城柵の一つとみることも十分に成り立つものであった。郭内に郡が置かれた可能性を含め、今後の調査を待ちたい。ここで明らかになったのは、大規模な二重の城と郭からなる都市が成立していたという事実である。城郭都市の視点でふりかえてみると、東北辺の城柵の内には、このような城と郭の複郭構造を示す例がいくつもある。広大で空白の郭を一周させた例が弘田柵跡で、それと似た規模の城郭構造の可能性が宮沢遺跡でみられる。広い郭を持つものに秋田城跡、伊治城跡、新田柵跡、あまり広くない郭が推定される例が桃生城跡や小寺遺跡である。仙台市郡山遺跡もほぼ五町の濠で囲む方格城内に方四町などの柵で囲った内郭と、その外部に寺などを含めた外郭相当部分をもつ可能性があり、その時期はいわゆるⅡ期での7世紀末から8世紀初頭に当る。また多賀城や城輪柵跡や胆沢城などは城外に都市的な部分を形成していったことも伺われ、志波城では広大な城内の外よりに住宅区をとりこんでいるとされる。規模の大小、郭のとりこみ方の違いや変遷を含みながらも、東北辺の城柵の多くは城と郭の構えをとり、その内に都市を収容したものから、住民収容地あるいは征軍などの収容地として空白地を設けたとみられるものまで、また複郭から単郭まで各レベルがみられる。城郭都市として、あるいは非常時に逃げこめる拠点としての城柵のあり方

がみられ、都市要件とその防備施設が実現したこと、及び必要に応じて造営可能だったことを都市史の上で評価していかなければならないであろう。西日本でもこのような視点から、例えば筑後国府における大濠による広い囲郭施設、あるいはその近くの上津土塁などの丘陵や門をつないで平野を区切る城壁<sup>(39)</sup>、鬼ノ城山城下の水城様の施設<sup>(40)</sup>などを含めて、城郭と都市との結びつき、あるいは山城と近傍都市との連携などを、日本での都城を頂点とする都市のあり方として検討していくことが必要である。住民や兵士の収容や物質の備蓄なども山城や城柵をみていく視点であることが判ってきた。

## ⑤……………歴博と城郭研究

歴博の総合展示において、弥生時代の環濠集落、古代の城柵や都城、中世の京都や鎌倉、武家の館、戦国期の城館や町、近世都市や城郭が具体的な復元を伴って展示され、歴史景観あるいは歴史事象の展示上で欠くことの出来ない要素として、また全体的な流れと各時代状況として展示されたのである。しかしこの防備兼都市計画などとしての施設全体を通して見る展示構成を作るという議論を経ることもなく、個別に取り扱われたことも事実として認めざるをえない。歴博の展開した共同研究の柱の一つに、都市研究があり、城郭もまた各時代でとりあげられた事はあるが、都市研究に通じて、都市要素としての城や郭の視点がとりあげられることはなかった。その背景として、日本の都市史において、研究上からみるように古代都城が都市の第一号としてとりあげられながら、そこには都市城壁、郭施設を欠くのが日本での特色という認識があったことが、出発点ならびにその後の都市史を貫く視点として強調すらされていたのである。しかし弥生時代以来近世城郭に至るまで、中核施設並びに外辺での区画ならびに防備施設<sup>(41)</sup>の存在は、その規模やレベルを問わないとすれば、各時代に当然存在したことが今ではみとれるのである。特に古代では、実際の国内外の戦争あるいは国家間戦争で有効な機能を発揮した事例が少なく<sup>(41)</sup>とされるにも関わらず、実際の軍事行動やその抑止、外国使節の迎接などで、長年にわたり有効に機能したと評価すべき側面があり、及びそのための多大な労力の投入を必要だった事柄として歴史的に正当に評価すべきである。歴博が関係して通史的な問題をとりあげた「城の語る日本史」の出版、共同研究における「人類にとっての戦いとは」の一連の成果、企画展示における古代豪族居館や中世城館の実態の取り上げなど、これまでも新しい成果のまとめ問題提示を含んでいることは確かであるが、各時代の政治や生活との関わり、各時代間の変転の実態や関連性など、これから更に掘り下げた議論を重ねるべき面もある<sup>(42)</sup>。歴史展示上で、政治の基盤、あるいは延長としての軍事的側面、あるいは防備施設の解明は欠くことのできないものでもあり、歴博のもつ全体的な歴史解明の役割の一つとして、今後も展示にも、また共同研究としても、成果を評価し、取り上げるべき研究課題である。現在の平和日本においても、目立たないまでも軍事関連施設<sup>(42)</sup>の存在は増々ハイテク化しながらも一定の役割を果たしている。人類の歴史の流れの一つとして注目していくことも、歴博の課題の一つとなるであろう。

## 注

- (1) — 阿部義平「古代城柵跡について」『国立歴史民俗博物館研究報告』1 1982
- (2) — 佐藤宗諄編『日本の古代国家と城』新人物往来社 1994
- (3) — 白石太郎編『歴史考古学』放送大学教育振興会 1995
- (4) — 進藤秋輝「多賀城と遠朝廷」『都城における行政機構の成立と展開』奈良国立文化財研究所 1997
- (5) — 伊東信雄「多賀城の発掘」月刊文化財三九 1966
- (6) — 築地・柵の認識の不備については註(1)、政庁配置や困郭については、阿部「古代城柵政庁の基礎的考察」『考古学論叢』1983  
政庁発掘と整備の誤りは今にいたるまで正されていない。築地認識も全く深められていない。“城柵の有する軍事的面を過少評価することはできない”が“軍事面だけを表にだす城柵論はやはり成立しない”と工藤雅樹『蝦夷の古代史』平凡社にあるのが代表的評価で、具体的には軍事面は評価しない。2001
- (7) — 斎藤篤「檀の越遺跡—平成12年度調査の概要—」第27回古代城柵官衙遺跡検討会 2001  
村田晃一『檀の越遺跡—平成12年度発掘調査概報—』宮崎町教育委員会 2001
- (8) — 註(4)進藤秋輝論文
- (9) — 石井進他編『城の語る日本史』朝日新聞社 1996
- (10) — 註(2)文献。柴田博子「鈴鹿関と不破関—壬申の乱とのかかわりをめぐって」
- (11) — 波多野寿勝編『美濃不破関』岐阜県教育委員会 1978
- (12) — 古代都城研究会実行委員会『古代都城の儀礼空間と構造』奈良国立文化財埋蔵文化財センター 1996  
古代都城研究会実行委員会『都城における行政機構の成立と展開』奈良国立文化財埋蔵文化財センター 1997
- (13) — 木原克司「難波京—瀬戸内と京のはじまり」『大阪城と城下町』2000
- (14) — 納谷守幸「酒舟石北遺跡」『大和を掘る』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1993  
相原嘉之他「酒舟石北遺跡」(第3次)の範囲確認調査」他『明日香村遺跡調査概報平成6年度』明日香村教育委員会 1996他
- (15) — 大和郡山市教育委員会『平城京羅城門跡発掘調査報告』1972
- (16) — 井上和人「平城京羅城門再考—平城京の羅城門・羅城と京南辺条条里—」条里制古代都市研究14 1998
- (17) — 森 正「恭仁宮跡の調査成果と課題」鈴木良章他「紫香楽宮関連遺跡の調査」条里制・古代都市研究16 2000
- (18) — 積山博「難波京の方格地割をさぐる」郵政考古紀要33 1997
- (19) — 阿部「日本列島における都城形成(二)—近江京の復元を中心にして」『国立歴史民俗博物館報告』45 1992
- (20) — 小田富士雄「西日本古代山城に関する最近の調査成果—特に朝鮮式山城について—」古文化談叢37 1997  
小田富士雄「日本の朝鮮式山城の調査と成果」古文化談叢44 2000
- (21) — 磯村幸男「北部九州の古代防衛施設」『城と館を掘る・読む—古代から中世へ—』山川出版社 1994
- (22) — 向井一雄「石製唐居敷の集成と研究」地域相研究27 1999
- (23) — 東日本埋蔵文化財研究会群馬実行委員会他『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』1998
- (24) — 佐藤信・他編『城と館を掘る・読む—古代から中世へ—』山川出版社 1994
- (25) — シンポジウム「古代国家とのろし」宇都宮市実行委員会他編『烽の道』青木書店 1997
- (26) — 木下良『日本を知る 道と駅』大巧社 1998  
木本雅康『古代の道路事情』吉川弘文館 2000  
中村太一『日本の古代道路を探す』平凡社 2000
- (27) — 国立歴史民俗博物館監修『人類にとって戦いとは1』『同2』『同3』東洋書林 1999・2000
- (28) — 下向井龍彦「律令軍制と国衙軍制」『人類にとって戦いとは2—戦いのシステムと対外戦略』国立歴史民俗博物館 1999
- (29) — 中尾浩康「延暦十一年の軍制改革について」日本史研究467 2001
- (30) — 阿部「古代山城と対外関係」『人類にとって戦いとは4—攻撃と防衛の軌跡』国立歴史民俗博物館監修 東洋書林 2002
- (31) — 国分市教育委員会『城山山頂遺跡』鹿児島県国分市教育委員会 1985

- (32) — 岸俊男「坊門と坊城」『日本の古代宮都』日本放送出版協会 1981
- (33) — 阿部「日本列島における都城形成—大宰府羅城の復元を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』36 1991
- (34) — 長洋一「新城「大宰府」の成立」註(2)文献
- (35) — 高野芳宏・菅原弘樹「古代都市多賀城」『多賀城の世界』ヨークベニマル 2000
- 千葉孝弥「多賀城外の方郭地割」『空から見た古代遺跡と条里』条里制研究会 大明堂 1997
- (36) — 註(7)文献 宮崎町教育委員会他「檀の越遺跡現地説明会資料」 2001
- (37) — 宮城県多賀城跡調査研究所の多賀城関連遺跡調査報告書に「東山遺跡」のシリーズが報ぜられている。宮崎町文化財保護委員会他「よみがえる古代ロマン 賀美郡衙東山遺跡」 1992
- (38) — 編纂を重ねた続日本紀の記事は、最小限内容からの復元を要する。玉造等五柵の内の三柵は、副使の鎮める玉造柵が山道方面、判官の鎮める新田柵、大掾が鎮める牡鹿柵は海道方面であり、自余の2柵は特使は出されなかった。征行路の出羽方面に向かう柵に色麻ともう一柵があるのであり、征行の距離の記事に賀美郡が出てきて、計測起点となる郡家の存在が知られる。一方遺跡の面から東山遺跡は色麻柵とみられる城生遺跡とほぼ同規模で、城柵の要件を明瞭に備えている。城郭内にも郡家が起点としてあり、続日本紀は地名重複を避けて柵を類推さず手法をとったとみられる。
- (39) — 松村一良『『日本書紀』天武七年条にみえる地震と上津土塁跡について』九州史学98 1990
- 上峰村教育委員会「堤土塁跡」 1978
- (40) — 葛原克人他『吉備古代山城鬼ノ城』山陽新聞社 1981の写真①参照。写真中央の人家が一列に並ぶ土手状地については、注意されているが未調査。稜線の峠などに土塁もあるが、中世の可能性がみられる。
- (41) — 実際は西日本の鎮として広嗣の乱にみえる例、東日本城柵が宝亀年間の反乱での全面的壊滅をうけた例など、攻防の焦点となった例が伺われ、また落城等の事件を経ずに、目的を果たした城柵もそれなりに評価される。
- (42) — 小論の提出期により、新しい山城や城柵の調査研究成果をとりあげていない所があり、次の機会を得たい。都城と城郭については、阿部「藤原京・平城京の構造」『古代王権の空間支配』青木書店2003が、先に公刊されたので参照されたい。

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

(2003年1月15日受理, 2003年5月9日審査終了)



---

## **Castles and Cities of the Japanese Archipelago in Ancient Times**

ABE, Gihei

In each of the periods of the history of the Japanese archipelago there existed bases for protecting villages, towns and cities, or fortifications that enclosed entire communities. With settlements situated on hills surrounded by trenches dating from the Yayoi period as the archetype, barricades and military installations with features unique to the periods in which they appeared have come to light. While castles from the Middle Ages and the Early Modern period are representative examples, further explication is required as there is still insufficient understanding of the actual conditions, changes and diversity of these facilities through the ages.

During Japan's period of ancient statehood dating from around the 7th through the 9th centuries, hilltop castles were built in western Japan, castle towns and barrier stations were built in the center of the archipelago, and castle stockades were built in eastern Japan. The histories connected to all of these developments are now known. The majority of ruins known about through documents have been subject to archeological surveys, with some ruins not mentioned in documents also having been discovered. The history of these kinds of large facilities of the ancient period maintained through huge outlays of labor and expense are intricately connected with the characteristics of this period in which interchanges between Japan and foreign countries gained momentum. Given the limitations of historical documents and insufficient archeological findings, theoretical understanding up to the present time has severely undervalued these constructions without having a clear picture of what they were actually like. This paper gives examples of substantial installations that were built out of necessity in various regions throughout the Japanese archipelago for the unification and defense of the state and for the defense of cities, towns and villages. Representative examples from Dazaifu, Heian-kyo and one example of a castle stockade in eastern Japan are described in this paper. However, there are still many aspects of the universal existence of defense installations and their historical development that are far from clear. This paper shows that between the 7th and 8th centuries and between the 10th and 11th centuries in certain regions there were towns and villages where circumstances required that they be defended. This paper presents a new perspective as a result of a re-examination of the actual conditions of these defensive installations and their relationships with castle towns and cities during the ancient period.